

ふるさと 風

第四十五号 (二〇一〇年二月)

風に吹かれて (10 02)

白井啓治

『わかれ道 どちら行く』

先月号では「わかれ道、足はみぎむき心はひだり」の一行の文を誌した。今月も同じような文である。どちらの文も、最近に創った文ではない。しかし、この言葉は頻繁に頭に現れる。

現実の日常では、毎日、いや時々「わかれ道 どちら行く」に出つくわし、その都度「わかれ道 足はみぎむき心はひだり」を実感させられている。わかれ道に来た時に、何の意識もしないで、右だ、左だ、と選択している人はいるのだろうか。

私自身のことを振り返ってみると、決まった道を行かなくてはいけない時であっても、どちら行く？ と迷ってみたり、右に進みながら気分は左に行きたいんだけれどな、と迷っている。何と落ち着きのない奴かと思われるだろうが、この選択の迷いは止める事は出来ない。

こんなことを思ったことはないだろうか。今ここで、現在の行動を止めて、時間を元に戻して左に行ったらどうなるのだろうか。と。また、こんなことを思うこともある。左を進んでいる自分も同時に実現できていたらどうだろう。と。

こんなことを何時も何時も思い、考えているの

は、如何に私は後悔にまみれ、悔んで悔やんで生きているかということだろう。しかし、私は根柢ではない。どちらかと言うとポジティブ過ぎて後悔を呼んでいると思っている。もっと言えば、幼すぎる何でも欲しがり屋、なのだろう。

愉快、ということから考えると、わかれ道に来た時その両方を同時に体験出来たら、その内容の如何に関わらず愉快愉快である。もし、最大の不幸と最大な悲劇を同時並行に同じ私が体験している実感が持てたら。もし、地獄と極楽を同時並行に同じ私が実感していたら。そう思うともうワクワクするほど愉快な気分になつてくる。

良い歳をして愚にもつかぬことを考える、実に閑で愚かな奴、と思う方は多いのではないだろうか。しかし、愚にもつかぬ事、と言つのは人間にとつては重要なことなのではないだろうか。賢い事ばかり隙間なく考えていたら、間のない間抜け人間になつてしまつたらどう。

既成を突き破る、これは作家、表現者にとって不可欠の感覚であり、力・才能である。型破り、掟破りが無いところには希望は生まれぬ。感情が豊かというのは、傍目には感情のムラとしか映らないだろう。

感覚的にはあるが、私は支離滅裂ということが大好きである。自分が支離滅裂をされることは

嬉しくないが、自分が支離滅裂をすることは大好きである。

そんな私だから、わかれ道があると直ぐに両方を同時に行こうとする。だから何かの選択・決定の場に出会つと、さあどちら行く？ 足は右むき心はひだりか？ となるのである。愛すべき我が心根、根性である。

話は突然に変わるが、年が明けて間もなく鈴木健さんから封書が届き、ライフワークとして長年調査・研究されてきた「日本語になった縄文語」を自費出版されたとの案内であった。早速、会の皆に話し、会として求める事とした。

以前に、出版前の原稿をCDに入れていただき、拜読させて頂いたのだが、今回本になったものを読み返し、大変に貴重で意義深い研究であると、その長年のご努力に、私流で失礼かと思うが、最大の愉快な快挙と賛辞を捧げたい。

本来ならば、こうした研究本は、日本人の文化遺産として確りと製本・出版されるべきものだと思うのであるが、文筆家の一人として、昨今の書籍離れには民間企業である出版社に怒りの矛先を向けるわけにもいかず、溜息を出すことしか我が術は無い。

鈴木さんとの出会いは、石岡に越して来て間もなくの頃に、本屋で「常陸国風土記と古代地名」を手にした時であった。実際の鈴木さんとの出会いはもっと後になるのであるが、常世の国を終の地と決め覚悟して恋物語百を書くことを後押ししてくれた本であった。嫌われた「香島」がヒントとなって生まれたのが、朗読舞女優小林幸枝が気に入っている「悪路狼夢(オロロム)」、悪路王の恋物語である。

石岡市に住む金子實さんは、昭和十年九月七日生まれ。御両親にとつて待ちに待った悲願の上に誕生した男の子でした。これからのお話は、金子實さんの奥さんから伺ったお話です。

實さんには二人のお兄さんがいたのだそうです。二人とも幼くして病で亡くなってしまったのだそうです。御両親の悲嘆は、言語につくせぬものであったそうで、藁にも縋る思いで占い師の門を叩いたのだそうです。

はたして占い師からは、あなたの家は男が立ちません。元気な男の子の誕生の為には、総社二丁目に鎮座する青屋神社へ参詣祈願することが良いでしょう、と勧められたのだそうです。

青屋神社につきましては、当会報第34号(09年3月号)に紹介しましたが、もう一度ご案内いたしましょう。

奈良、平安時代に常陸国の国司として、都から着任すると、常陸国の一の宮である鹿島神宮に参拝するのが習わしであった。国司が鹿島神宮に参拝するには高浜から舟で行くのが通常であったが、荒天で出航不能のときは、高浜の渚にススキ、マコモ、ヨシなどで青屋(仮小屋)をつくり、そこから鹿島神宮を遙拝し、参拝に代えたという。それが青屋祭りの起りりと云われている。遙拝式後の直会(なおらい)にススキを箸にしてウドンを会食した。この遙拝式場が高浜の地に常置され、高浜神社の起源となっている。

この青屋祭神事は、近世になりますと、青屋の馬場と呼ばれるこの辺りで行われた。神拝が終わると公家装束の税所氏と小仁所氏は侍姿の大勢の

供をつれて高浜に移り高浜神社に参拝した。現在は町内氏子会、七十人によって青屋神社内で行われ、ススキの箸でウドンを頂いたりする直会は今でも行われ、なかでも妊婦さんの参拝がありますと安産のおしるしとして、麻の紐(10センチ位でお産に臨む時髪を結う)と小さな四角のお餅を頂けるそうです、毎年7月21日頃に行われる。

無事に誕生した實さんには、男の子として元気に育つようと、不思議な儀式が行われた。誕生してすぐに野外に捨て置かれた。そして篩にかけられ(実にならないものを篩にかけて振り落とすの意味)、それから箕に載せられ、やっとお母さんの胸に抱かれたそうです。この行いは当時の村長さんのお役目であったとか。

こうして体の弱かった實さんは、「捨てちゃん」「捨てちゃん」と愛称され、髪の毛はオカッパ二にし、赤いもの、女の子らしいものを身に着け(當時は大変貴重な布で、工面して集めた端布三十三枚を縫い合わせた着物等)5歳まで女の子として育てられた。その間にも、お母さんの青屋さまへの熱心な参詣祈願は続いたのでした。

その願いは叶って、5歳過ぎると元気な男の子として成長していきました。やがて成人し、結婚された實さんの奥さんには、姑さんからの容赦ない厳しい教えがありました。

青屋さまへの参詣は奥さまはじめられた。手造りの進物と感謝と御礼の気持ちを持って毎日欠かさずお参りしましたよ」と話される奥さんの優しいお顔の瞳には「信じればみな救われる」という弘法大師の教えを思い起こされました。

信仰の厚くなった奥さんは、事あることに方々の神社や観音様への参拝は欠かさなかったそうです。

す。

そんな奥さんにも幾つかの災難がふりかかりました。偶然にも青屋さま前でのバイク事故や家の階段からの落下等、いずれも大事に至らず青屋さまが手を差しのべて下さったと笑顔が大きく見えしました。

厳しかった姑さんの教えからも、三人のお子さんの心やさしい味方に救われ、現在は、元気な實さんとお孫さんにも囲まれ、農作物を愛しみながら、幸せいっぱいの日々を暮らさせて頂いているとの事でした。

その節は、手作りの食材でのおもてなしを本当に有難うございました。お腹いっぱい幸せいっぱいひとときでした。

・金屏風に男女の山 街は暖あかり ちえこ

利根町七福神巡り

小林幸枝

今年一年、幸せであることを願って、茨城県利根町の七福神巡りに行ってきました。七福神を廻ってお参りしたからといって、願いが全部かかって福がたくさん来るとは思いませんが、でも七福神を全部廻ってみると、気持ちがあすつきりとした感じになり、これは良運の兆しかな、と思ったのでした。

一周十二キロの七福神巡りですが、一神ごとに自分の思いや願いを呟いてみると、何となく良いことが起きそうな気持ちになって、嬉しい気分になるのはこれはやはりご利益なのかもしれません。

折角ですから、私の廻って来た利根町の七福神について、紹介しましょう。

・早尾天神社・福祿寿

祭神は学問の神様・菅原道真で、春には梅が満開になるといって参道に寿老人と同じく現世利益の信仰を集める儒教の神仙福祿寿が鎮座。幸福、慶祝、家内安全をつかさどる神で、片手に持っている巻物はさまざまな名案・妙案、推謀術数が出てくる縁起呪物です。

・円明寺・布袋尊

五十段ほどの石段を上がった山門の先にある一風変わった本堂上部の月星型の寺紋は、この地の勢力者だった千葉宗家の家紋と同じだそうです。創建以来たびたびの火災で古い記録が焼失し創建には諸説があるようです。布袋尊は中国に実在した禅僧といわれ、托鉢僧のモデルとも言われています。円満完成、平和、家運隆盛をつかさどり、手に持つ福袋に願を掛けると幸運のご利益があるといわれています。

・蛟網神社・大黒天

奥の宮と門の宮の二社があり、別名文間大明神とも呼ばれています。町指定有形民俗文化財になっています。日本武尊が参拝したという伝説もあり、周辺は史跡や伝説が数多くあります。門の宮の鳥居のすぐ右側に安置されている大黒天は縁組勤労、経営、裕福、科学、農耕の繁栄をつかさどる神で、打ち出の小づちは商売繁盛のシンボルです。

・布川神社・恵比寿天

神社は、町指定有形文化財。七十七段の石段を上ると「天の岩戸図」の絵馬が奉納された本殿があり、その左脇に右手に釣竿、左手に鯛を持った恵比寿天が鎮座されています。古来漁業の神様として港近くに祭られ、ほかに医薬、酒造、商業の繁栄もつかさどります。神社から受けた笹を家の清浄な場所に置き、1年後に新しい福笹と代えると商売繁盛の御利益があると言われています。

・応順寺・寿老人

八重咲きの銘木「八ツ房の梅」が植えられています。小林一茶と親交のあった俳人の古田月船の墓も境内にあり、その墓には「花守りがよその花見る月夜かな」と句が記されています。不老長寿や厄除、健康安楽、開運をつかさどる寿老人が持つうちわは、諸病・諸厄を払うと言われています。

・来見寺・弁才天

一五六〇年に府川城主豊島頼継が創建した古刹の境内に安置されている弁才天は、七福神の中で唯一の女神です。そのルーツは古代インドの神サラスヴァティーで、水のせせらぎの音から音楽の才たける神として当初は「弁才天」とされていました。やがて江戸時代には蓄財の神様として庶民から琵琶を抱えた「弁財天」として広く信仰されるようになりました。

・徳満寺・毘沙門天

国指定重要文化財の「金銅版両界曼荼羅」や子育て地蔵のほか、柳田國男が民俗学を志す原点になったという「間引き絵馬」が奉納されています。

財宝福德や名譽、地位をつかさどる毘沙門天が境内に安置され、その手に持つ如意棒は孫悟空と同じといわれています。

初めて七福神巡りをし、今年一年の願いを伝えてきましたが、七福神がそれぞれにつかどっているご利益のすべてを貰おうなんて欲張ったことは思いませんが、七つの神様に一つ一つ願い事を話してみると、願いたい事そのものが去年の反省点となって浮かび上がってくるようで、そのことが当にご利益なんだろうと気付かせてくれました。

皆さんもぜひ一度七福神を廻ってみたらいかがでしょうか。私のように欲張って願いを話してみると、自分に対して新しい発見があるのではないかと思います。

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

今年はギター文化館が開設して18年になります。今年も魅力いっぱいのコンサート・シリーズを予定しております。御期待下さい。

2月21日(日) PM2:30~ 鈴木大輔ギターリサイタル
3月21日(日) PM3:00~ 吉川二郎ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457
Fax 0299-46-2628

初日に願いをこめて

伊東ヨ子

新年を迎える明方、住職家族が留守になるので鐘を撞くことになった。山内の外燈もみな消えている。暗の中でやっと秒針を見つけ、十五秒前に「六つ時」の鐘を撞き始めた。撞く、十念を唱える、を六回繰り返す訳だが三拍子が難しく戸惑った。音色に強弱が出来たらうが四方に響いていった。

今年の大きな目標は、いよいよ「玉里御留川」を完成させる三月が三ヶ月後に迫ってくる。実質四年係りの作業が実りの時期を迎える。リーダーと仲間の本当にご苦労さまの限りだ。後三ヶ月もう一踏ん張り皆の健康を願って初日をお詣りに行く為に出発した。

新築している本堂の屋根の西側に傾いた月を背にして上玉里の寺を出発、下玉里の台から田に降りた。枯れた蓮の葉も茎も眠っている。左側に川中子の友の家を見て園部川の橋を渡った。水戸藩の権威で支配された「玉里御留川」「御川筋」の中で支配された人達の生産の様子や生活の場を感じてみたい。現代にだってこの川を取り巻く問題は沢山あるのだから、寒さ等吹きとばして行く。沿岸には沢山の魚場があったのだが、今は形として残っていない、知る人も殆どいない状況だ。今朝はただコンクリートの堤を走ることにした。小川の地内はあっと過ぎ沖須に入る。水の囁きが聞こえてくる。語り合う様にも聞こえる。風のない陽が上がる前の静かさ、水辺の鳥の動きも声もしない。初詣の人の車が左の方から時々聞える。

羽生、八木蒔の人家も眠っている。堤には人氣

もない。

天空の様子に変化が起き始めた。暗から灰色そして濃紺が青くなった。浜の森の上に、反対側の筑波の山々が桃色に塗られてきた。南側の出島、その先の尾根沿いに、北側の小川の尾根に桃色の細い帯は広がっていった。歩いていっている人に合った。「おめでとうございます」の声に私も返した。気持ちのよい一瞬。時々振り返る。玉里の郷、高浜、筑波の山並み、その上に月が眩しい程綺麗だ。桃色から橙々に東の空が変わって西に反射し、南北方面も刻々と変えていった。写真を撮ろうと筑波の方を向いてピントを合わせている人に合った。「ごくろつままですね」反射的に「はいありがとうございます」と擦れ違った。何となく「御留川」の話でもしてみたいと思った。

私の回りで、湖の中で、空気が動き出したのを感じた。浜を越える頃には黄色から黄金色に東も筑波にも光り、南へ北へと金粉を飛ばす様だった。波が出て来た。水草の辺りで鳥の動きがあった。梶無川を渡る時には平成二十二年の陽が出た。この一瞬は感動だった。毎日の日の出とは違うのだろくな、車の数も増した。マスクを通して吐く息がとても気になる。大橋の上は風が強い。広い水の流れの上に立つ不安、水の上で風を受ける緊張感を強く感じながら橋を右に曲がった。

暗から明けていく美しさは終わり、田伏に入ると一度に疲れが出始めた。昔だったら今日は旧十一月十七日だからこの水面は賑わっていたことだろう。漁が盛んだったろう。舟が動き、漁師達は大声をかけ合い、女達も忙しく立ち働いていたろうか。怒鳴声や笑い声が湖面の風に乗って響いていただろうか。

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。
営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。
オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
0299-55-4411

箒木川を渡る頃、陽が上るにつれ寒さと暖かさの差を強く感じた。波が動き出した。風も増す。柏崎の大きなカーブを廻る頃、一気に自転車が動かなくなつた。風が前から来る。波は一層大きく荒々しく動いている。コンクリートの護岸を打ち付けている。初日をお詣りした気分の良さに比べ、帰りの足は辛かった。ふうっと、

(俺達貧乏人は初日を拝むなんて事はなかったよ。長い土農工商の制度の中で差別された事は身に染み込んでいて、明治に身分制度はなくなったとはいつても大正、昭和と続き終戦後急に民主主義と言われても、気分が急に変わる事も出来ず、居候住まいが続き心に余裕は産れなかった。この年齢じゃな寝てた方がいいよ)という老人の話しを思い出しながら、何だこの位走らなければ歩けと自分を励まし、遠くに見える故郷を目差す。

安食の小津、陽の中に柀塚が見えた。対岸下玉里の大井戸の稲荷の森がよく見える。ここに線を引いて右が「御川筋」「外川」だ。左が「玉里御留川」「内川」だ。水草の豊かな茂り、波、水、魚にとつて良い条件の場所であつたろう。漁の舟だけでなく渡し舟、江戸へ行来する大型の運送船と、水面一杯に賑わつていただろう。争いも絶えなかつた事だろう、高架津も宍倉の三ツ谷も通る。

井関の八木は霞ヶ浦に突き出ている、玉里とは一番接近している。こつちに渡つて来た咎人の縄を解いて貰う「縄とき地蔵」もある。寒いし流れが近道を選ぶ事にした。干拓の中を急いだ。出発時の気持ちも薄れ、寒い、疲れた。空腹と煩惱渦巻く私の目に美しさを発見。山崎の森へ続く農道の枯草の姿に一つ一つの美を見つけた。風に揺れて枯れても尚個性ある生命を感じた。心とんで石

川、三村へと入った。ここに境堂がある。対岸高崎の鉾の宮とに線を曳いて左側を小漁場とした所高浜干拓になつてゐる所は恋瀬川が注ぐ豊かな小漁場の中心で自由な漁場だつた。河岸で栄えた高浜を通る頃には太陽と向い合う形となつた。あつたかさに包まれていた。山王川から高崎に入った。対岸を見、道路、堤防、干拓等を省いてみると広い水域だつた事がわかる。上高崎は河岸と共に下高崎は漁で栄え、この湖とは係わり深い村だつた。恵比寿神社は絵図も大きく描かれている。

下玉里は湖に突きでている。ここまで連れて来た咎人を籠から下ろした籠ぬけ地蔵、御稗蔵の跡も伝わっている。稲荷の森から柀塚を見た。陽が高くなつて眩しい、近くにあるビニールハウスを目当て捜すとすぐ解かる。時代の変化です、外川は広いと改めて思い、こういう政策を作れたのも対岸が同じ藩内だつたからだと聞いた。「玉里御留川」「御川筋」と一周して来た。三月に向かつてリーダーと仲間と一緒にもう一頑張りしようと思つた元日である。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6
☎0299-24-3881

歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

2月13日の第4回朗読会は、打田昇三作「国分寺余話・番外編・中国大陸の国分寺」です。

定員10～12名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読会料金(1,000円・・・コーヒーorお茶、お菓子付き)朗読終了後、ふるさと作家打田昇三さん：脚本演出家白井啓治さんを囲んでのお話し会があります。

ふるさとは次の世代に残さねばならない文化と希望の玉手箱

2月号なのに『初夢』とは、ピンボケも甚だしいと思われるかもしれない。しかし、この原稿を書いているのは、正にお屠蘇気分の真最中。こんな小品でも、熟成・投稿するまでには、一か月はかかる。

私は長年温めている妄想遍歴の数々を、何かにしたためておきたいと願っていた。この世の中に、いい歳をして、こんなアホな夢を抱き続けるヤツがいる。低次元の妄想と一笑に付されるだろう。暫く、鉄格子の病院にでも入っていたら…と御親切なお声がかかりそうだが、本人はいたってマジメ。

すべての科学の法則や、発明発見のスタートは、まずナンセンスに近いような仮説の設定から始まる。試行錯誤を積み重ね、どう足掻いても物にならないのが大部分。没の憂き目が常。日の目を見るのは、ほんの一部である。

17世紀のフランスの数学者フェルマーが投げかけた超難題「フェルマー予想」の方程式は、全世界の数学者が3世紀半かけても解けなかった。幾多の挫折の後に、ついにイギリスの数学者ワイルズが、1994年、日本人の論文からヒントを得て、やっと解明に成功した。この難題に挑戦して、一生棒に振った天才数学者が、世界中に何人もいたという。「予想」は350年の暗闘の末「定理」となった。

このようなイバラの道も、苦闘の末、いつかは『なせばなる』。人間の知能の奥深さに、ただただ感動するのみ。これから述べる私の幾多の夢物語も、殆どはナンセンス。しかし幾つかは「正夢」

になってほしい。いつの日か晴れて実現することを切に願う。

【1】各駅乗降対応のノンストップ超特急列車
こんな矛盾した話はある得ない。妄想にすぎない。これが普通の感覚であろう。

すべての中途駅で、この列車(T1)は一切停車しない。最高速度のまま通過だ。しかし全ての駅で降りたい人・乗りたい人を全部対応できる。そんなことできるわけがない。いやそれが私のオリジナルアイデアでは、できるのだ。この列車T1の動力は、リニアでもジェットエンジンでもよい。広軌は勿論、時速600kmほど。全て自動制御。その方法は？

始発駅(S1)を乗客満席でスタート。次の駅(S2)で降りたい人は、S2駅が近づいたらT1の一番後ろの「降客用車両」(降21)に移動する。移動が完了したら、降21はT1から切り離され、本線を離れ、静かにS2駅に滑り込み、降客する。

一方、S2駅でT1に乗りたい人は、予め「乗客用車両」(乗22)に乗り込み、T1が近づくと前に、S2駅を発車し、本線上を先行走行しながら、待機。後ろから来たT1が、乗22を捕捉・ドッキングして、通常走行に移る。

同様S3では降31を切り離し、乗32を連結…こうして次々、T1列車は、一切ストップすることなく、各駅で客を乗降し、終着駅へ滑り込む。

強力な推進力には、強力なブレーキが必要。地

震など、どんな緊急事態が起きるかもしれない。各駅停車しなければ、消費電力は非常に少なくなるだろう。所要時間は、極端に短縮されるだろう。

世界が平和になり、巨大な軍事費など不要になれば、このシステム導入は、そんなに大変なことではないはず。JR様、いかがでしょうか？

【2】植物でありながら動物でもある生き物
植物は、光合成により、無機質から栄養を作り、「独立栄養」を営む。動物は他の生物を食べてエネルギー源とする「従属栄養」によって生きていく。自然界は植物や動物だけではなく、どちらともいえない「菌界」など合わせ5つの「界」から成り立つ。

そもそも生物は、この地球上で今から36億年前、温暖な海底で、原始的な構造でスタートした。おそらくすべての生命の源は、この偶然に生まれた「代謝と増殖」をする1個の単純な細胞が、元祖である。それから何億年もかけ、植物的な単細胞と、動物的な単細胞とは、海中でそれぞれ進化を遂げ、今から、10億年前、やっと多細胞生物へと進化していった。そしてさらに3億年ほどかけて、クローン生殖のみでは、環境の激変などに対応できないため、雌雄に性が分かれ、生殖の時、遺伝子を半分ずつ持ち寄り、多様な子孫を残せる機能を獲得した。

遺伝子の組み合わせで、温度、酸素濃度、PH、太陽光の強弱、栄養源の種類など多様な環境変化に、うまく対応できたものが生き残る。対応できなかったものは、種が絶え、石油・石炭などとなり、埋没していく。こうして生命は地球上に繁栄

してきた。

そこで本題。現在、細胞工学の進歩により、色々な細胞を融合・発生させ、キメラ（一つの個体に異なった形質が入り混じった生物）動物、キメラ植物を作ったりできる。ウズラとニワトリの細胞融合から、両者の特徴を併せ持った動物ができる。その技術を進展させ、細胞の基本構造など異なるが、植物細胞の胚と動物細胞の胚とを融合させる。「葉緑素」を体内に持ち、光合成で独立栄養の植物の体制をとりながら、他の生物を栄養源とする動物の体制も併せ持つ生物を、工場内で大量生産できないか。

20世紀初頭15億人だった世界人口も今や68億人。人口過剰でケンカばかりの今日の地球人。今世紀末には、ほぼ100億人に膨れ上がるという。

それゆえ植物構造と動物構造を併せ持った、もっと生産コストの低い食糧資源を確保する必要がある。

神の領域を侵す不遜な考えかも知れないが、そういうことができないのならば、人類の生殖機能を、直ちに半減させる手を打たないと、宇宙地球号は、すぐパンクする。

【3】丸薬の形を変えろ！

歳をとってくると、血圧降下剤など、なにかにと、薬を飲むハメとなる。私は生活習慣病予防のため、食事・運動・禁煙・禁酒など非常に気をつけていた。その効あつてか知らぬが、60歳代までは最高血圧は120そこそこで、何の問題もなかった。

ところが70歳を過ぎ、愛犬が19歳10か月で亡

くなってからは、私の運動量は減るし、つい「おやつ」などにも手を出してしまう。体重は増えるし、筋力は激減。血圧も140前後に上がるなどして、心ならずも薬の厄介になるハメとなつてしまった。

さて悲しいかな、歳をとってくると、指先がいろいろと、ママならない。掴んだものを落としたり落ちる。

そこで提案。製薬会社に物申す。特に年寄などが多用する丸薬は、まん丸ではなく、ニワトリの卵型の、即ち一方が鈍円で、落としても遠くへ転がっていかない形に、設計変更できないか？卵が巢から遠くへ転がらないよう、自然界で生物が、折角獲得した「神の業」を、活かさぬ手はないでしょう。

【4】ワイヤレス送電システム

またまたトンデモナイことを申し上げ、恐縮至極。

具体的な数字は知らないが、発電所で発生させた電力を、消費地まで高圧線で送り届けると、かなり漏電というか、ロスが起きるのだそうだ。化石燃料を燃やすなど、地球温暖化防止の「騒音」を受けながら、折角発生させた電力が、その輸送過程で何割も失われるのでは、誠に残念である。

さて、このようなロスを生じるのも、発電所から消費地まで、効率の悪いワイヤで送電するからではありませんか。工場や家庭に届いた電力も、機械や家電製品まで、またまたワイヤで繋ぐ。物によっては、変圧器で電圧を降下させたりする。このワイヤが、何とかならないものでしょうかね。人ごみの中で、ワイヤレスマイクなど真に結構な

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

もの。電波なら、ワイヤレスで、送信できるのだから、電圧もなにかならないか。私の夢は、
①航空機や人工衛星の運行に差し支えない高さのところに、しかも、夜、日陰にならない南北極地の上空に、超巨大な太陽光発電装置（A）を浮かべ、大量に電力を発生させる。
②一方、巨大電力消費地（主に中緯度）などの上空にも、電力中継用の衛星（B）を浮かべらる。

③AからBへ電力を無線送電する。
④Bから、地上の工場や家庭へ無線で電力を供給する。電車や自動車も、上空の中継衛星から、電力の供給を受け、無公害で走行できる。
おそらく、地球より100万年ぐらい文明が先行している、宇宙のどこかの惑星では、これくらいのシステムは、とつくに実現していると思う。

【5】ブーメラン兵器

2010年1月3日、NHKは大河ドラマ「竜馬伝」第1回を放送した。ところが同日、ある民放が、竜馬は誰により、なぜ殺されたか……を送った。それによると、竜馬はピストルを持っており、剣術の腕も、北辰一刀流免許皆伝。オモオメ殺されたのは、心を許す仲間にはやられた……との結論であった。現場には新撰組の下駄や刀の鞘などが残っていたが、これは偽装。その仲間達は明治新政府の重要な地位についている。真相は悉く彼等により闇に葬られた。

一方、殺された理由は、竜馬は大政奉還し、江戸城無血開城を進めていたが、竜馬と関わりが深い、長崎のイギリス人武器商人グラバー一味にとって、無血開城では、武器が売れない。そこで、

幕府を徹底的に叩きのめさなければ日本の革命は成功しない。……と竜馬の仲間達をそそのかし、暗殺させた……。

武器産業の後押しで大統領になったヤツが、世の批判をもとめせず、イラク戦争をおっげじめた。国民を飢えさせ、武力国家に血眼の將軍様もいる。

さて本題。ブーメランはご存じアボリジニの飛び道具。獲物に命中しなければ投げた本人の手元に還ってくるという、全世界に類を見ない優れた道具だ。200年前、石器時代の彼等がこれを使っていた。

そこで私の提案。武器産業と死の商人は全て抹殺すべきだ。戦争とは正義のためとか、やむを得ずとかは全て方便。戦争は全て悪。ならば、戦争のための武器は全廃。廃棄できないのであれば、国連などが全ての武器に対し、発射したなら、弾丸は必ず自分のところへ逆戻りするよう、完璧に細工を施すべきだ。弾を発した者は必ず自爆の運命を背負う。

【6】楕円形コンパス

コンパスとはオランダ語であるが、和名を見て驚いた。「ぶんまわし」「円規」「両脚規」「根発子」等。

私は、何十年も、楕円形を描く2本脚の、簡単なコンパスが世の中になくともかと思いついてきた。（すでに実際は存在しているのかもしれない。ただ私が知らないだけなのかもしれない。）

広告など、楕円図形は日常よく用いられる。描き方は2点の固定した焦点に、一定の長さの糸を結び、糸を張って2つの焦点とで3角形を作り、

その点の連続が描く弧が楕円である。しかしこれを、2脚のコンパスで簡単に描けないか？ コンパスの2脚の基部に円盤のようなものを取り付け、目盛りを刻み、思い描こうとする楕円形の長軸と短軸の長さ（あるいはその「比」）を、数字盤にセットすれば、どんな形の楕円形もたちどころに描ける。そんなコンパスが、なぜ未だに発明されていないのか？

【7】水陸空対応万能スーパーマシーン

日本では見たことがないが、ニュージーランドでは、自家用の水上飛行艇が、ずいぶん飛んでいた。また、私は南島のマウンツクックの氷河に、八畳間に入るくらいの橋をつけた観光用の超小型飛行機で、山の斜面の氷河に着水したことがある。勿論、山の麓の滑走路は車輪で飛び立つ。

さて、飛行機と船と自動車の機能を一台に組み合わせたスーパーマシーン。水陸空対応の万能自動車だ。水上飛行艇は、機体を水に浮揚させるためには、車輪代わりに大きな船状の脚が必要だ。そして空を飛ぶためには、重量を支えるに足る大きさの翼が必要である。更に、空を飛ぶ時には、船も車輪も余計に空気抵抗を受けるので、折り畳み、格納する必要がある。車体重量の問題。離陸に必要な推力を得るエンジンの問題。難問極まりない。

さて陸上での自動車の部門は、ほとんど進化完了。車道をいかにして滑走路化するだけで、諸問題をクリアできている。難問は車が水上と空をどう運行するかだ。発着を考えたなら、翼より、ヘリコプターのような回転翼の方が良いか。

水陸空、共通した問題点は台風、騒音、環境汚

染、衝突防止、インフラ整備など大変である。更に、

*陸上では、路面凍結、地震、立体交差、動物など。
*水上では波高、水中動物(カバ・ワニ)・流木など。
*空中では、乱気流、鳥、着氷、航空管制など。

問題点は多すぎるが、やってやれない事はない。今世紀末ぐらいに何とかならないか。いずれもこれまでの人類の技術革新で、不可能ではないと信ずる。宇宙人の力を借りなくとも、この地球人ならきつとできる。最大の問題は、とにかく、人口過剰による乗り物の数が多すぎる。現状では、どっちを向いても何かに衝突しそうだ。それらをクリアして、一日も早く実現してほしい。もし私の存命中に実現不可能としても、せめてヒコ孫の孫あたりが、そのスーパーマシンに乗れる日を！

*夢はさらに膨らむ。自動車と言いながら現状は、人が運転しており「完全自動操縦のマイカー」に格上げできないか。「すべての型のインフルエンザに有効な万能ワクチン」「マラリアワクチン」「集中力強化訓練マシン」「通訳機能を備えた携帯電話機」。究極は死刑廃止なら、悪党供は「人工冬眠」で半永久的に眠らせておきたい。痴者の夢は尽きない。

● バラに似て 妻は花散り トゲ残る…

● さて、新聞のサラリーマン川柳にあった。たまに妻との舌戦は決して接戦にはならず、敗戦はいつもズッコケ亭主の当方。敵の口撃を封じるため、女房の口元に取り付ける「チャック」(またの名をサルゲツワ)を発明した人には、即刻ノーベル賞をやりたい。全世界のか弱き紳士諸君！急

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(征服の大義) (1000円)
菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価:500円)
伊東弓子作 「風のかけ」 (定価:400円)

打田昇三:ふるさと「風にたずねて」(. . .) (定価:1000円)
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価:500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!
ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を詠いたエッセイ集
兼平ちえこ 「風に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組:800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館:0299-46-2457
・いしおか補聴器:0299-24-3881
にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡13979-2(白井方)
電話0299-24-2063

いでチャックの発明にガンバロウ! 女房は広沢
虎造の親戚なのかな。♪ バカは死ななきやく
と唸っている。
最後に、絶対不可能と思われたことが、いとも
簡単に成し遂げられた事例をあげ、稿を閉じたい。
今ここに、急いで大手術をしなければならぬ
人(X)がいるとしよう。手術をする為には大出
血を予想し、半月以内に1200mlの新鮮な自己
血が必要というのが条件。ただし1回の採血量は
400mlで、採血間隔は1週間とする。また新鮮
という意味は、採血から24時間以内とする。

さあ、あなたはどの条件を、いかにしてクリア
しますか。最愛の人をどうやって救いますか。
答えは、
①今日X氏から400ml(a)を採血し冷蔵保
存。
②7日後、X氏の右腕に、先週採血した自己血
(a・400ml)を輸血しながら、左腕から、
800ml(b)を採血し、保存する。
③同様14日後、b・800mlを輸血しながら、
1200ml(c)を採血・保存する。

④新鮮な自己血1200Mℓ(c)は確保できた。

15日目には、安心して手術ができる。

マジックでもトリックでもない。冷静に判断すれば、こんなことも、しっかりできるのです。

「夢」は持ち続けたいものですね。

国分寺余話

打田昇二

(1) 仏教の伝来

石岡には常陸国分僧寺と国分尼寺の遺構が残されている。どちらも寺とは言いが、聖武天皇が思いつきで造らせた天皇・皇族・貴族の安泰を祈願するための施設であり現代の寺院とは猫と虎ほどの違いがあった。何よりも一般の人々には無縁の場所で多分、町の人々は立ち入ることが出来なかったと思う。然もその工事の為に貧しい暮らしの中で駆り出され、税を取られ、苦しめられた民衆の大きな犠牲を伴っていたため、律令制度が崩壊して国家が見捨て、その保護と特権を失うと国分寺は国民からも見放されてしまうのである。

全国の国府六十六か所に置かれた国分僧寺と尼寺の大半は鎌倉時代頃から荒廃を始めて化け物屋敷のようになり、何の遺跡だか分からなくなっていたことが想像される。常陸国も例外では無く江戸時代に石岡の郷土史家が、水戸学を齎った学者の先生を招いて歴史の話を聞いた。その時に「国分寺・国分尼寺とはどのようなお寺だったのか？」という質問をしたところ、学者先生は胸を張って「古代の寺と言うのは役所のことである。つまり

国分寺は国府庁舎の一部である。また『尼寺』は尼さんの寺ではなく『規則を定める』仕事をした役所のことである」と堂々と答えている。

確かに古代の中国では「寺」は役所の意味に使われた文字らしく、また初期の日本の寺では仏教に関わる高度の学問を教えるはいたが、坊さんが住み着いていたのは紛れもない事実なのである。水戸黄門が儒教を信じていた関係もあって水戸学で仏教を軽視するのは分かるが、国分尼寺には尼僧が居たことも将門記などの記録にある。それを学者先生が「嘘」と断言するほど当時の人たちは国分寺のことを知らなかったことになる。幕末時代でもその様な状況であったから、現代ではその多くが所在地さえ分からなくなっている。特に国分尼寺跡は史跡に指定されている場所が全国で九か所しか無く、国分僧寺でも塔の跡だけしか分からないものを含めて三十八か所である。

さすがに日本一の大国であった常陸国は国分僧寺と国分尼寺の規模も大きかったよう遺構が国の特別史跡に指定されており、これは国分寺遺跡では遠江国（静岡県磐田市）と常陸国（石岡市）だけで、尼寺の跡は石岡が唯一である。ところで莫大な予算を使い庶民に労役を強いて建造した常陸国分寺は完成から僅か六十年ほどで焼失してしまう。石岡市史では「兵火」としているが、その時代に合戦の記録は無い。なぜ焼けたのか？ 桓武天皇の三人の子が皇位に就いた平城（へいぜい）、嵯峨、淳和（じゅんな）各天皇の時代には関東から東北にかけて大規模な民衆の暴動や帰化してきた新羅人の反乱などがあった。新治郡の不動倉（国が管理する飢饉用の食糧庫）が十数力所も焼けた記録がある。その時に庶民抑圧の象徴で

もある国分僧寺が焼かれたのであろう。暫く廃墟のままでもよく再建したものを直ぐに焼いたのは攻め寄せた平将門の軍勢である。この時にも国分尼寺は焼かれずに済んだらしいが、その代わり尼さんたちが冬の最中に丸裸にされてしまった。国分尼寺が焼けたのは戦乱の時代のようなのである。

南北朝時代からあった幾多の合戦やら町の大火など、全ては過去に埋没してしまった国分僧寺と国分尼寺であるが、その跡だけとは雖も揃って唯一か所の特別史跡として国から指定されているのが石岡市に在る常陸国分寺遺跡なのである。時の流れで国分寺は普通のお寺となり、尼寺の跡は草原と化してしまった現代では石岡市民の関心も薄れている。それでは千数百年も前に建立のために苦勞をさせられた祖先の霊が浮かばれないであろうから、石岡市民はせめて国分寺に関わりのあることは概略でも知っておかねばならないような気がする。まずは庶民が深入り出来ない禁断の仏教界から覗いてみる必要がある。

日本に仏教が伝来したのは、未だ天皇制による全国統治が出来ていなかった西暦五〇〇年代のことと言われてきたが、それにも三つの説がある。蘇我王朝時代の西暦五五二年初夏に、朝鮮半島の百濟（くだら）国王から使者が来て「軍隊を派遣してくるよう」に「日本の王に要請をした。当時の朝鮮半島では高麗国と新羅国とが連合して百濟国や加羅国を圧迫していた。日本は朝鮮半島に領地を持つており、そこも取られる恐れがあると百濟国の使者は訴えた。しかし蘇我王朝も未だ日本国内を完全に抑えていた訳では無いので救援軍も出せず、激励の電報だけ打って誤魔化した。困った百濟王が「何か日本の王が珍しがるよう

な手土産は無いか」と、探し出したのが中国から伝わっていた仏像と経典なので、その年の十月十三日にそれを風呂敷に包んだ百済の使者が日本へ来て再び援軍の要請をした。ところが仏教がどういうものか知らない日本国内では、これを異国の神様と解釈して受け入れに賛否両論が対立し、有力部族間に大喧嘩が始まったため、百済王の狙った援軍要請は無視されてしまった。

百済王が詐欺に遭ったようなこの出来事を「日本書紀」の記述に依り西暦五五二年としていたのは戦時中の歴史書であったが、戦後の歴史見直しでは年代誤差などから西暦五三八年説が浮上り現在の歴史年表で採用している。丁度、謎の多い継体王朝に替わり蘇我氏が勢力を伸ばし始めた頃である。それでは仏教の日本伝来は西暦五三八年で決まりかと言えば、これがまた厄介なことに西暦五二二年には「既に仏教が日本に入っていた」と言えるような史実がある。

十四世紀以後醍醐天皇や足利尊氏などが登場するのは日本の南北朝時代であるが、中国の歴史にも南北朝時代があり、南朝三代目に「梁(りよう)」という小さな国があった。朝鮮半島や日本列島に面した中国東部、山東半島から渤海沿岸辺りに短い間しか存在しなかったから地図にも載せて貰えないような国ではあるが、仏教が盛んで寺院の建築などに優れた技術を持っていた。「だるまさん」と親しまれている禅宗の始祖・達磨大師が印度から来たのが梁の国である。そこから「司馬達等(しばたつと)」なる人物が家族ぐるみで早々と日本に来ていて司馬さん一家は仏教徒だった。

日本の歴史は天皇制を中心として、その神秘性・高貴性を高めるために天孫降臨などと言う嘘

の神話で国民を騙していたけれども大和朝廷は九州へ渡って来た大陸系民族の子孫である。従って中国或いは朝鮮各地との交流は西暦四百年代の初め頃から頻繁に行われており、司馬達等もその一人なのだが仏教国の梁から神様の国・日本へ来たので、遠慮しながら仏像を拝んでいたのである。此の一族は法会の導入や寺院建立など日本における仏教の興隆に大きな役割を果たしている。そこで司馬達等が来日した西暦五二二年が「仏教伝来の日」の有力説として着目されるようになったのだが司馬家個人のことなので採用されなかった。

一方、百済の王様が贈ってくれた仏像は大陸系部族の蘇我氏がお堂を建てて安置し蘇我一族の神として祀られた。ところが程なく国内に病気が流行り出した。多分、百済の国の豚から伝染してきたのであろう。反対派の物部氏が「くだらない神を祀るからだ！」と騒ぎたてたので仏像は堀に沈められ寺は焼かれてしまった。仏像を贈ってきたのは百済の王であるから普通ならば日本は怒って援軍を出さない筈なのだが、翌年の夏に軍船と武器を送り込んでから大軍を派遣している。当時、既に近畿地方には蘇我氏を中心として大勢の百済系の人々が住んで居たことをうかがわせる。そして司馬一族など中国系の民族も居たからいわゆる渡来人の間で仏教が信仰されていたのであろう。蘇我氏が権力を増して王朝に発展していったことも仏教が広まった要因である。

仏教と言えば一万円札でお馴染みになった聖徳太子が連想されるのだが、どうも近年の歴史研究では「聖徳太子なる人物は実在しなかった」とする説が多い。日本の古代を記録した書物は「古事記」「日本書紀」「諸国風土記」など奈良時代に作

られた史料しかない。日本書紀や古事記は歴代王家の記録である「帝記」「天皇記」「国記」を基に書かれた。その原本を編集したのが聖徳太子なる人物と蘇我馬子だと言われる。それらの貴重な記録は蘇我入鹿が中大兄皇子と藤原鎌足に暗殺された「大化の改新」と言うクーデターの時に焼けてしまった。辛うじて燃えかけた「国記」に水を掛けて消した家来がいて一部分だけ煤けて残った。日本の古代史が焦げ臭いのはその所為である。

聖徳太子と言うのは、蘇我王朝の一族で古代史の編纂に関わり、特に仏教の受け入れと普及に尽力した人物がいて、それが仏の功德を頭わず伝説と重なって創造された人物と考えたほうが現実的である。厩戸皇子という名から、誕生伝説にキリスト教の影響を推定する意見もある。いずれにしても、謎だらけのこの人物は当時の政権の中樞から仏教を広めていったのである。

その聖徳太子こと厩戸皇子が生まれたとされる西暦五九三年よりも十年ほど前に、百済国へ出張していた二人の役人が帰ってきて、お土産に二体の仏像を蘇我馬子に贈った。馬子は司馬達等らに命じて仏教に詳しい修験者を探させた。播磨国(兵庫県)に居た北朝鮮から渡来した僧侶で一旦は廃業した恵便という者が召し出された。蘇我馬子は恵便に命じて仏教の決めごとに従い一人の女性に尼僧の資格を与えさせた。これが日本における正式な仏教徒の第一号である。

その女性が司馬達等の娘で名を「島」と言う。当時、十一歳と記録されているのだが、達等が日本へ来た年代と合わないから娘では無く孫なのかも知れないし、年代が出鱈目なのであろう。島女は僧になったから「善信尼(ぜんしんに)」として

仮の寺を与えられ、二人の尼僧が付けられた。

数年後には、蘇我氏がライバルの物部氏を滅ぼし正式に王朝の主となった。それを祝って百済国から仏舍利が献じられた。仏舍利は釈迦の遺骨だが、印度で行われた葬式の際に大勢の門弟たちが奪い合って持ち去ったようなので、日本まで届いたとは考え難く合成樹脂製だった可能性もある。それは目をつぶるとして、同時に百済からは僧侶九人のほか寺大工、装飾金属加工職人、瓦を焼く専門家、壁画を描く画家など寺院建築に必要な専門家集団がやって来た。

蘇我馬子王は、来日したエンジニアたちに善信尼の居た寺を与え、さらに豪族の屋敷を解体して寺に改造させた。これが日本最初の寺で「飛鳥寺」とも呼ばれる法興寺である。入れ替わりに善信尼は百済国へ官費留学をさせられ本場の仏教を習うことになった。善信尼は二年ほど留学して帰国し、現在の奈良県櫻井市の寺に住んで仏教を広めた。この場所は石岡にも伝わる龍神山伝説の本舗であり大和朝廷発祥の地でもある三輪山の麓になる。善信尼は自分で山に入り寺を建てる木材を選んだとする記録が残っている。程なく善信尼の許に仏教を信ずる男女が集まるようになったのだが、その名前から見て大陸系帰化人がほとんどである。自然に恵まれていた日本列島の住民は山・川・草・木から自然現象まで、身近に存在するものの全てに霊を感じ「神」として崇めていたから人間の形をした仏様やら訳の分からないお経にすぎない必要もなかった。何より日本に文字が無く、難しい漢字を読める庶民などは居らず、初期の仏教は一般の庶民に全く無縁の存在であった。そして根本的な間違いは、百済国王が日本の王に仏像と経

典を贈った際に信仰の効果を「仏法に帰依すれば仏の加護で国家は安泰であり、敵国を調伏出来ませ」と言ってしまったことにある。

仏教の本来は釈迦の目指した「あまねく迷う人々を救うことが出来る―いわゆる衆生済度（しゅじょうさいど）でなければならぬのだが、百済王は自分でも勉強不足で「仏教は国家のため」としか言わず、伝えられた日本でもそのように信じていた。やがて「オヤジとワラジ」を間違えたぐらいに違った形で広まった仏教は庇護者の蘇我王朝を失ったものの、大化の改新で政権を奪った天智・天武両王朝に引き継がれてゆく。

その頃迄に建てられていたと推定される寺は奈良の法隆寺、元興寺（飛鳥寺）、中宮寺（法興寺）法起寺（池後寺）と京都の広隆寺（蜂岡寺）、それに大阪の四天王寺などである。丁度、有名な小野妹子が遣隋使として中国の都・長安（現在の西安）に派遣される前の年、西暦では六〇六年に日本でも一丈六尺（約五・三m）の大仏像が完成した。制作に携わったのは百済国から来た仏像技術者の一行と、日本の仏教信者第一号である善信尼の親族、つまり司馬達等の子孫たちである。大仏は銅製のものと金糸を編み込んだ刺繍製のものがあり元興寺には銅製が運び込まれた。ところが仏像制作とお寺の建築工事が別個に行われたために安置すべき元興寺の金堂に大仏が持ち込めない。金繡製なら折り畳んで入れることが出来るのだが予定を変更する訳にもゆかず、関係者は慌てて金堂の扉を壊すことになった。それを止めたのは鞍作鳥（くらつくりのとり）と言う仏師である。こじつければ善信尼の本名が「鳥」で仏師が「鳥」だから、善信尼の兄か弟と思われる。ともかく司

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」

を開いています。（各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円）

絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）

詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師：小林幸枝 白井啓治)

朗読教室（講師：白井啓治）

エッセイ教室（講師：白井啓治）

教室の詳細は、...

「ことば座事務局」(担当：白井) 電話 0299-24-2063 E-mail : shirais3@maple.ocn.ne.jp
までお問い合わせください。

馬達等の一族で「鳥（止利）仏師」として後世に名工の名を残した。現存する法隆寺の釈迦三尊像などはこの名人の作と言われる。この人が金堂の扉を壊さずに、手品のように大仏を収容したのである。関係者一同、喜んだのは言うまでも無い。

元興寺では早速、記念の行事として法要を行い集まった人々に齋（とき）と言う施しを行った。

これが最初となって毎年四月八日と七月一五日には法会が行われるようになり、現在も国分寺に伝わる「御釈迦様（花まつり）」の行事と、道路公団が儲かる「孟蘭盆（うらぼん）」の行事に発展したとされている。ただし、孟蘭盆の行事には元興寺の法会に加えて、その頃に日本に来ていたイラン人の、古代から先祖を祀る少しエロチックな風習が関わっているようである。

小野妹子が遣隋使として派遣された際に通訳で同行したのも司馬達等の子孫だと思われる人物である。他にも学者と僧侶が行き、帰国する妹子と共に隋の使者も日本へ来た。日本が中国大陸と急接近したので、朝鮮半島に在った百濟、高麗、新羅、任那の国々も競って人事交流を始めたのだが、言葉の壁があるから来日するのは漢字で書いたお経が読める僧侶が中心になる。こうして神の国を自慢にしていた日本も次第に仏教国になり、日本仏教史によれば西暦六二〇年代には全国に置かれた寺院の数が四十六、そして約七十年後には五四五寺に増えたと記録されている。一方、近畿地方を手始めに人種的にも中国系、朝鮮系との混血が進んでゆくので、縄文人の遺伝子を受け継ぐ純粋な日本人は東北地方へ追い込められてしまった。

現在の宗教は冗談かと疑うような教団を含めて数え切れないほどの団体がおり、経典も数多く使わ

れている。仏教の本来は「釈迦」の教えであるが釈迦本人は何一つ書き遺していないと言われる。釈迦の没後に何人かの弟子が「：釈尊の教え：」と称して適当なことを書き残した。弟子の中には逸材も居たがそれなりの人物も怪しい奴も居た。釈迦の死後、百年程経って教団内の保守的なボスたちが「小乗仏教」又は「上座仏教」と呼ばれる民族別・部派別の、どちらかと言えば独善的・閉鎖的な仏教を興し、それが現在はタイ、ラオス、カンボジアなどで信仰されている。

日本に伝わった仏教は、小乗仏教を批判し自らを「大きな乗り物」に例え普遍性のある宗教にした「大乘仏教」であり紀元前後に印度から西域シルクロード諸国を経てチベット、ネパール、モンゴルから中国大陸、朝鮮半島へと広まった。

釈迦が茸の食中毒で亡くなったのは紀元前三八三年二月十五日である。一人で故郷へ向けて行脚を続けている途中にネパール国に近いガンジス川支流域のパーブアー村で、鍛冶屋の息子チュンダ君から貰って食べた茸に中った。責任を感じて看護するチュンダ君に「：お前の責任では無い：私に最後の食物を供えてくれたお前には功德がありご利益がある：」と言ったのが最後の言葉であるから、仏教についての遺言も無かった。百年も経ってから「：これこそ釈迦の教義である：」と言って自称弟子たちが経典を書いたのであるが、釈迦のサインでも無い限りは、どの経典も何処まで信用ができるのか：何の証明も無いのである。

先ず、日本に持ち込まれた経典は法華経、維摩経（ゆいまきよう）、勝鬘経（しょうまんぎよう）の三巻だけで、宗派も無く僧侶たちは意味も分からず、馬鹿でかい声さえ出せば良いと三つのお経

を暗記するほど読んでいた。そのうちに推古天皇時代の終わり頃になって高麗国から慧灌（えかん）という僧侶がやってきて元興寺へ迎えられ「三論」という高度の仏教理論をブチあげた。これを聞いた僧侶たちは、小学生が東大入試問題を見せられたように驚き、弛み始めた日本仏教界が勉強不足を自覚したのである。

実はその前年に、ある僧侶が祖父を斧で殺害する不祥事があり低下した仏教界の質が心配されていた。天皇は慧灌を日本初の僧正に任命し僧侶に活を入れさせたのである。慧灌が持ち込んだ教義「三論」には仏教の決め球とも言えるべき「色即是空・空即是色」の思想が盛り込まれている。日本仏教はチンペンカンペンの状態から、次第に人間救済の悟りの境地を説く本来の宗教へと進化してゆくのであるが、内容は如何に経典を解釈するかであり未だ庶民が理解できる段階では無かった。

西暦六四五年六月十三日は神話の時代から脱して事実上、現代まで続く天皇制が創始された日であり歴史的には「大化の改新」と呼ばれている。その際に中大兄皇子こと後の天智天皇と藤原鎌足が共謀して倒した蘇我王朝こそ仏教を導入した政権なのであるから、立場上はここで仏教も排斥されるところなのだが、クーデターに賛同した豪族たちの間にも仏教を信じる者がいた。

中大兄皇子はクーデター成功の後に慎重を期して直ぐ天皇にはならなかった。従兄弟の孝徳天皇などにお鉢を回して様子を見たのである。この時に天皇候補の一人に挙げられた異母兄の「古人大兄皇子（ふるひとのおおえのおうじ）」は母親が蘇我氏なので身の危険を感じ、慌てて辞退をして中宮寺（法興寺）に隠れた。中大兄皇子自身もクー

データの直後に法興寺を城代わりしているから寺院そのものが避難所のような役目を果たしていたのかも知れない。天智天皇は仏教を弾圧も奨励もしなかったようであるが、周りには多くの仏教徒が居て、新政権も仕方無く布教を許したのである。白雉（はくち）二年（六五一）の暮には二千百人の僧侶が二千七百の灯火の許に集まり宮殿内でお経を合唱するまでになった。

「大化の改新」で打ち出した政策の一つに「薄葬令（はくそうれい）」がある。古墳時代には死者の権威や一族の虚栄のために競って馬鹿でかい墳墓を拵えていた。その無駄を省き、天皇には家来となるべき豪族たちの力の誇示を抑制する目的で「薄葬」つまり墓に金や労力を掛けることを禁止したのだが、その反動で豪族たちは競って氏寺を建立するようになった。筋違いながらこれも仏教が広まることになった要因である。

日本の首都が平城京（奈良）に決まるまでの、いわゆる「飛鳥・白鳳・天平時代」は、大陸との交流が活発化して新しい仏教が伝えられた。白雉四年には、元興寺で修業した僧の道昭が唐の国へ渡り、三蔵法師から直接の教えを受けて難しい三論の奥義を極め、また禅を学んで帰国した。道昭は日本で最初に火葬に付された人物である。火葬の普及は、豪族たちには不本意ながら「薄葬令」の普及に役立つ結果をもたらした。

一方で、この時代は朝鮮半島との関係が難しくなり白鳳四年（六六三）に、日本は敗戦の憂き目をみている。数万の軍勢を派遣して百済国を救援に向かい白村江（はくすきのえ）の会戦で唐と新羅の連合軍に大敗したのである。どうも、その時代の歴史が書き換えられているようで真相は闇の

中であるが、記録を見るとやたらと外来人が増えているから、或いは新羅の軍隊が日本を占領していたかも知れない。新羅は仏教芸術の国と言われている。その支配を受けるようになった日本も仏教擁護派の蘇我王朝を倒した天智天皇が洩々と仏教を認めざるを得なくなったのであろう。

天智天皇が皇位に就いていた期間は数年しか無いが、実質的に権力を握っていたのは十年ほどである。天皇の死後、皇太子の大友皇子（弘文天皇）と皇弟の大海女皇子とが「壬申の乱」で争い、大海女皇子側が勝利する。その勝利の蔭に伊勢神宮に関わりの深い部族の協力が有ったから日本古来の神様が脚光を浴びることになる。天武天皇となった大海女皇子は神様だけでなく仏教も保護する政策をとったから衰退は免れたのである。

飛鳥時代から奈良時代にかけて少しずつ仏教が広まるにつれて、日本古来の神を仏と結合させる「神仏習合」の思想が生まれた。伊勢神宮、鹿嶋神宮などの有力な神社内には「神宮寺」という寺が造られるようになり、やがて寺が神社を支配するよう形となって明治維新まで存続した。

天武天皇の後には皇后であった持統天皇、天武天皇の孫で持統天皇の甥である少年の文武（もんむ）天皇、その母親の元明天皇、その娘の元正天皇と天武系が続き、特に信仰心の厚い女性天皇が三人も居たから、仏教は天皇家に深く根差すことになった。この時代に登場するのが藤原鎌足の子で壬申の乱を逃れた藤原不比等である。

やがて不比等の孫でもある聖武天皇が仏教全盛時代を創り出すのだが、不比等が登場したのは法律に詳しい官僚としてである。国民の支配が目的ではあったが現在の民法、刑法、商法などに相当

する律令は文武天皇の時代に「大寶律令」が、そして元正天皇時代に「養老律令」が制定されている。不比等はその作業の中心に居た。律令には「僧尼令」として僧侶・尼僧に関わる二十四条の規定があったようである。皇族の庇護を受けていた仏教はその反動で国家の統制を受けるようになってきた。

奈良時代は西暦七一〇年から始まる。諸国に国分寺、同尼寺が建立されたのはこの時代であり正に仏教の全盛時代になる。現存する古い寺は飛鳥・白鳳・天平時代に建てられた幾つかを除き大部分が奈良時代に建立されたものであると思う。奈良の都には東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺、秋篠寺、法華寺、西大寺などの大伽藍が聳え大勢の僧侶が奈良に居たことであろう。

既に述べたように日本に仏教が伝来した当時の經典は法華経など三巻しか無かった。そこへ高麗国の僧・慧灌が難かしい「三論」を持ち込んで強烈な刺激を与え、法隆寺の道昭が中国から法相（ほつそう）宗を伝えた。さらに唐の国から招かれた道璿（どうせん）が華嚴宗を開き、鑑真和上（がんじんわじょう）が苦難の末に来日して律宗を齎すなど大陸との仏教交流が頻繁になり華嚴、三論、法相、律の各宗派に加えて難解な学派の仏教である・舎（ぐしや）、成実（じょうじつ）の各派が伝わった。ここに「南都六宗」と呼ばれる形が出来たのだが、この六派は一寺一派をとらずに、六宗派が兼学として相互に向上を図っていたようである。やがて三論・舎、成実の三宗は興福寺を本山とする法相宗に吸収され、現在は華嚴宗本山が東大寺に、律宗本山が唐招提寺にと伝わっている。これが「奈良仏教」である。

ところで石岡に遺構が残る常陸国分僧寺と国分

尼寺は創建が奈良時代でも奈良仏教に入らない。奈良仏教の後は天台宗と真言宗に代表される「平安仏教」であり、その後は印度に発生した浄土思想に基づく念仏仏教の浄土宗、浄土真宗、さらには達磨大師が伝えた禅の思想が日本で自律した臨済宗、曹洞宗、黄檗（おうぼく）宗、そして法華思想の日蓮宗や、奈良・西大寺の真言律宗など、いわゆる「新仏教」と呼ばれる「鎌倉仏教」であり奈良、平安、鎌倉の各時代に興ったそれらの仏教が現代に伝わっているのである。

現在、石岡市に残る寺院の殆どは記録を失っているが、寺伝を信用すれば奈良時代に建てられたと思われる寺は東耀寺と本浄寺である。これは最初から庶民の寺として人々に保護され千数百年の時を経ることができたのであり、民衆の犠牲の上に造られた国分寺は消えてしまった。その遺構だけでも残されていることは奇跡に近いのである。

（参考資料・国分寺余話関連年表）

西暦五二二年（継体天皇時代）

中国大陸の東部に在った小国・梁（りょう）から日本へ来ていた「司馬達等（しばたつと）」が家族ぐるみで仏教を信仰していた。

五三八年（宣化天皇時代・蘇我王朝時代）

この年が「仏教公伝の年」とされている。朝鮮半島で新羅国と高麗国に攻められていた百済の国王が日本に援軍を要請してきた。その時に百済の使者が「仏像と経典」を持参し「印度から朝鮮まで多くの国々で尊ばれている法である」と説明した。

有力部族の物部氏と蘇我氏との間で「仏教信仰の是非」を巡って対立が起こり、蘇我氏が

これを信仰した。ところが朝鮮半島で流行していた病気が日本にも伝染したため、物部氏が騒ぎ仏像は捨てられた。やがて蘇我氏が政権を握り、物部氏が衰退したので仏教は朝廷や貴族の間で徐々に信仰されるようになる。

五五三年（欽明天皇時代・蘇我王朝時代）

百済国から「経学の博士」が来日した。

五七六年

欽明天皇の第九女・豊御食炊屋媛（とよみけかしぎやひめ）が敏達天皇の皇后となる。皇后はやがて推古天皇となり、聖徳太子を皇太子として仏教の興隆につとめた。（聖徳太子は存在が疑問視されている）

五七七年

百済王が經典を届けてきた。同時に何名かの僧侶、尼僧、寺院建築技術者、仏師などを日本に帰化させた。

五八四年（敏達天皇時代）

百済国出張から戻った役人が二体の仏像を土産に持ち帰り権力者の蘇我馬子に贈った。馬子は司馬達等に命じて仏教に詳しい修験者（恵便）を探させ、司馬達等の娘に必要な戒律を与えさせた。その娘（島女）は恵便を師とする僧「善信尼」となり仮の寺に入った。これが日本における仏教徒の第一号である。

五八七年（崇峻天皇時代）

名族・物部氏滅亡、蘇我氏は王朝成立の記念として難波に四天王寺を建立させた。

五八八年

百済国王からの使者が崇峻天皇に仏舍利（釈迦の遺骨）を献じ、同時に僧侶、寺院建築技

師、仏教絵師などを日本に帰化させた。この渡来者たちは善信尼が居た寺に住み、入れ替わりに善信女は百済の国へ仏教留学した。

五九〇年

善信尼が留学から帰国、奈良櫻井に寺を建てて布教につとめた。多くの信者が集まったが、大半は帰化人であったと思われる。

五九二年

推古天皇が即位した。大臣の蘇我馬子が最初からの仏教信奉者であったから仏教が興隆し有力者は競って寺院を建立した。

五九五年

高麗国から高僧の恵慈が来日、聖徳太子に相当する人物の仏法の師となった

五九六年

中宮寺（法興寺）が出来る。恵慈らが住む。

六〇三年

渡来人の秦氏が仏像を広隆（蜂岡）寺に祀る。

六〇六年

一丈六尺の国産・大仏像が完成し、これを飛鳥寺（元興寺）の金堂に収めた。これを祝って布施（ほどこし）が行われた。この年に初めて推古天皇の前で「法華経」が読まれた。

六〇七年

先々代・用明天皇の発願による法隆寺が飛鳥の里に完成した。この年、遣隋使として小野妹子が派遣された。（翌年帰国）

六〇八年

小野妹子が再度、隋の国へ行く。この時に複数の学者と僧侶が留学生として同行した。

六〇九年

百済国から僧侶など八十数人を乗せた船が九

州（熊本）に漂着した。これを送り帰そうとしたが、日本在住を希望したので飛鳥の元興寺に住まわせた。

六二四年

蘇我馬子が病気になる、平癒祈願の為に男女千人が出家した。

六二三年

任那国の使者が来て仏像などを献じたので、これを 四天王寺などに置いた。

六二四年（推古天皇三十二年）

全国の寺院は四十六寺、僧侶の数は八一六人、尼僧は五六九人とされる。この年に或る僧侶が自分の祖父を斧で殺害する事件が起こり、僧侶の品質低下が問題となった。規律を確保するために「僧正」「僧都」を置いた。最初の僧正には百済国から来て難解な学論に精通した学僧の観勒（かんろく）を任命した。

六二五年

高麗国王の命により高僧の恵灌（えかん）が来日したので、これを元興寺に迎え僧正に任命した。恵灌は高度な「三論宗」の理論を展開したので日本の仏教界はショックを受けた。現在に伝わる「色即是空・空即是色」の観念はこの時点で生まれた。

六三二年（舒明天皇時代）

新羅国の仲介で唐の国から初めて高僧を従えた使者が来日し、国交が始まった。

六三五年

百済国から仏塔建築の技術が伝わった。

六三九年

日本最初の九重塔が飛鳥に建造された。

六四〇年

飛鳥で「無量寿経」の講座が開かれ、法要と布施が行われた。

六四二年（皇極天皇時代）

蘇我馬子の墳墓が築かれた。（蘇我王朝説）

六四五年（孝徳天皇時代）

乙巳（いつし）の変―中大兄皇子と中臣（藤原）鎌足によるクーデターが起こり、蘇我王朝が倒された。（六四六年、大化の改新）これにより仏教の衰退が案じられたが、新政権も仏教を容認した。

六四八年

新政権の左大臣・阿倍内摩呂が四天王寺に仏像などを置いた。

六五〇年（白雉元年）

刺繍製の大仏像などが各地で作られた。

六五一年

内裏の庭で僧侶・尼僧の計二百名による読経の催しが行われた。

六五二年

内裏で高僧による仏教の講座が開かれた。

六五三年

遣隋使・小野妹子に従い留学し帰国後に国政に関与していた「僧旻（そうみん）」が没した。孝徳天皇は中大兄皇子に弔問させ、多くの仏像を飛鳥の河原寺（弘福寺）に置かせた。

この年、元興寺の僧・道昭が唐の国へ渡り、三蔵法師から直接の教えを受けて難しい「三論」の奥義を極めた。

六五七年（齋明天皇三年）

イラン人男女六人が九州へ漂着した。これを飛鳥に呼び寄せ、記録では二度目となる孟蘭盆の行事を行わせた。

六六〇年

内裏で仁王般若経の講座が開かれた。

六六三年（天智天皇・白鳳二年）

百済国と組んだ日本は現在の韓国西南部に兵を出し、唐・新羅の連合軍に大敗した。新羅軍が日本（主に九州）を占領したとする説がある。

六六八年

天智天皇が近江国に志賀寺（崇福寺）を創建した。（平安時代には廃寺とされた）

六七〇年

落雷により法隆寺が炎上した。

六七一年

天智天皇が没し、大友皇子が即位（弘文天皇）
大海女皇子（天智帝の弟）は仏門に入るとして都（近江京）を離れ吉野に向かった。

六七二年（壬申の乱）（天武天皇）

大海女皇子の挙兵・弘文天皇敗死・天武天皇に協力した伊勢神宮の威光が強まる。

六七九年

僧・尼僧の服装態度などに規制が行われた。

六八〇年

諸国寺院について、国家が管理する寺と私的な寺とに区分された。

宮中で今光明経及び仁王経が講読され、諸国の寺でも講読するように命じられた。
天武天皇が皇后（天智皇女・後の持統天皇）の病氣平癒を祈願し薬師寺の創建を発願した。

薬師寺は持統・文武両天皇が藤原京に造営して六九八年に完成、やがて平安遷都により七一八年に現在地に移された。

六八四年

百済国から僧、尼僧など数十人が日本へ帰化
六八五年

天武天皇の命により、諸国の家ごとに仏舎を
造り仏像と経文を置いて礼拝供養させた。
この年に初めて僧、尼僧を宮中へ入れた。
六八七年（持統天皇）

天智天皇の法要が志賀寺で行われ「国忌」と
するよう定められた。

六九〇年

新羅国から僧侶など五十人が日本へ帰化した。
この頃の日本国内における寺院の数は五四五
か寺とされている。

【風の談笑室】

本会報も今回が45号。3年と9カ月になる。石
の上に3年ではないが、3年を過ぎてから風の会
や会報に対する反響というか、風の吹き方とい
うか、が随分と変化して来たように思う。

そこでというわけではないが、「風の談笑室」な
るコーナーを設け、ちょっとした情報交換や書簡
欄のような場がつくれたら、と考え、初めてみよ
うと思ったところ、偶然ではあるが、こつしたコ
ーナーを待ってました、とばかりに話しが幾つか
湧いてきた。

昨年初め頃からだったと思つたが、本会を応援し
て下さっている木村進さんの開設しているホーム
ページ（1300年の歴史の里 石岡ロマン紀行）
の中に、ふるさと風の会のごとば座のコーナーを
設けて頂いていた。それが昨年12月7日に独立し

て新しいホームページ・ふるさと風を立ち上げて
頂いた。

新しく立ちあがった所為なのかどうなのかは分
からないが、早速にMさんという方から「会報を
読ませてもらいました」という風の会までメール
が入ったのであった。ちょうど11月号に龍神山
の二つの佐志能神社に関する話しを載せたことに
関連してお話でした。

「神社は本来2社祀るのが本筋で、その歴史が
忘れられている」と一色史彦氏が言っておられま
すが二つの佐志能神社というのは、それに関係
するのではないのでしょうか、といったものでした。
そのメールを会員の方々に紹介したら、打田さ
んが早速その返事を以下のごとく編集事務局に届
けてくれました。

（意見へのお礼）

打田昇三

「ふるさと風」第四十三号で、石岡市に在る：
と言うより、在った、と言ひ直したほうが適切な
龍神山麓に祀られる二つの佐志能神社について書
かせて頂きました。テーマは「すぐ近くに名前も
祭日も同じ二つの神社が違う集落に祀られてい
る」ことへの疑問推定のようなことですが、石岡
市史や地元の言ひ伝えなどを根拠として村上、染
谷両集落の分村に絡み、地域での勢力関係も影響
したことであろうか…と勝手な推測で幼稚な論を
展開しました。

「ふるさと風」は木村進さんのご協力でも
ページが新たに開かれたそうで、四十三号発行か
ら間も無く主催の白井啓治さんからメールなるも
のを印刷した文書を頂戴しました。内容は四十三
号をお読み下さったMさんからの貴重なご感想と

ご意見であり、「ふるさと風」の会の一員として
浅学不肖ながら「ふるさと」の歴史・文化の再発見
と創造を考える」という大義名分に戸惑っている
身にとつては有難い御教示を賜ったことになりま
す。「ふるさと風」をお読み頂いても内容について
ご意見を頂くことは極めて稀なことです。改めて
厚くお礼を申し上げます。

斎書房の太田さんには、いつも御助言を頂いて
おりますが、何年か前に会として太田さんのご紹
介で一色先生のお話を拝聴したことがあります。
神社・仏閣に精通された先生のご意見を伺う機会
は滅多に有りません。有難く存じております。

お説による「二社併祀」は個人的にも興味のあ
ることで早速、大正時代の「官・国幣社」資料を
見直してみました。確かに伊勢神宮の外宮を雄略
天皇時代（疑問はありますが）に丹波国から迎え
たのを始めとして六、七社が併祀されているよう
です。静岡市の賤機（しずはた）山にある大歳御
祖神社（おおどしみおやじんじや）などは駿河国
総社宮だった古社であり、大日貴命（おおなむち
のみこと）を祀る神部神社と、木之花開耶姫命（こ
のはなさくやひめのみこと）を祀る浅間神社の三
社合祀の国幣小社に指定されていました。

古事記による神話でも天御中主神（あめのみな
かぬしのかみ）以下、天地確立まで独立神が続き、
宇比地邇神（うひじのかみ）と妹須比智邇神（い
もすひちのかみ）のコンビから相對神となり、
その中で伊耶那岐神（いざなぎのかみ）と妹伊耶
那美神（いもいざなみのかみ）の夫婦が国々の創
生などを始める訳ですから、御説のように二社併
祀が原則だったことが自然のように思われます。
では、なぜ全部が併祀ではないのかを勝手に推

測してみますと伊耶那岐神は奥さんの妹伊耶那美神を早くに亡くしてしまった…あの世へ面会に行った旦那に醜い姿となった奥さんが怒り、喧嘩分かれになって、旦那が再婚した話も無い。さらに神様の格の違いも関係し、又はメールでご指摘頂いたように何らかの事情で潰されてしまった神社もあり…そのようなことから一社の例が起こり、代わりに殆どの神社に見られるように「撰社」として幾つかの神様を同居させることにしたのではないのでしょうか？（それが多い）

「馬鹿のことを！」とお叱りを受けるかもしれませんが失礼があったらお許しください。メールで頂いたことを自分なりに考えてみた次第です。改めてご教示にお礼を申し上げます。

今後とも「ふるさと風」を宜しくお願い申し上げます

実際こつしたMさんのようなお話を頂けることは、会報を出している者にとっては、大層嬉しいことである。改めてMさんにお礼を申し上げますとともに、このようなお話しを常に頂けるような会報でありたいと思っている。

今月号からギター文化館の代表木下明男が昨年11月にスペインに行かれたことについて「私のスペイン旅行記」と題して、4〜5回の連載で書いて頂けることになっており、原稿締め切りの少し前に、こんな風に書いていきます、とメールを頂いたのがあったが、急な仕事で書けなくなってしまった。それで、ごめんなさい、の連絡と合わせて、マヌエル・カーノ コレクションを分かりやすく解説してみました。何時か掲載して下さい」とあった。何時かではなく、今月それを載せない

と、紙面を埋めることが難しくなる。

早速に、マヌエル・カーノ コレクションについて、ご紹介したいと思う。

マヌエル・カーノ・コレクションとは

ギター文化館代表 木下明男

ギター文化館は、一九九〇年一月に他界した、スペインの生んだコンサートフラメンコギターの巨匠マヌエル・カーノのコレクション十八点を収めるために一九九二年に建設されました。

マヌエル・カーノは、生前十八世紀のバロック・ギターなど珍しいギターを収集しており、なかでも「私のレオナ」と名付けて愛用していたA・トールレスなど、ギターファンにとっては一度は見たい貴重品です。

トールレスは、十九世紀に活躍したスペインの製作者です。それまでヨーロッパ各地で様々な発達を遂げていたギターの良いところをまとめて、現代のギターの原型を作り上げました。

共鳴胴の内部にある仕切り版の置き方を変えたりして、ギターを少人数相手にした伴奏楽器の地位から、コンサート用の楽器に変身させました。

今のギターの理想とされている、繊細で色彩感豊かで、心を締め付けるような甘さを秘めた響きを確立させました。ピアノの発達とともに、チェンバロやリュート、ギターなどそれぞれの楽器が廃れゆくなか、スペインのギターの伝統が残ったことに、トールレスギターの果たした役割は大きいと言えます。

M・カーノは、亡くなる直前、楽器店に勤めるM氏とコレクターのH氏に「自分のコレクションを日本で生かし、保存を…」と夢を託しました。

生前、M・カーノの日本公演を実現していた東京労音が、没後記念になる事業を…の考えと台致し、ギター文化館の建設が実現しました。

M・カーノは「私のギターが、博物館などに弾かれない状態で飾られているのは嫌…」と、アメリカの博物館からの申し出を断っていました。

カーノの思いを生かし、ギター文化館では、ギターの歴史が解る展示・ホールの併設で内外の一流ギタリストによる名器を使用したコンサートの実現。また、館内にギター工房を作り総合的なギターの殿堂にし、世界のギターの名所にするのが夢です。

M・カーノ没後二十二年に当たる今年、その夢の一つを実現できたことは何よりもうれしい事です。更に、3月21日(日)には、カーノ先生の高弟である吉川二郎ギターリサイタルも行われます。

この風の談笑室では、風の会に寄せられたご意見、感想をはじめ、風の会 ことば座の情報、また風の会・ことば座を支援下さる方々の情報などを基に紙面を構成していきたいと思っております。

昨年、11月から「いしおか補聴器」の阿部さんのご協力の下、風の会 ことば座が一緒になって「ふるさと知ろう会 なる朗読会と雑談会」を始めました。主に、風の会の打田さんに、ふるさとの歴史に纏わる朗読物語を執筆してもらっている。

ふるさとを知ろう第一回のテーマは、国分寺でこれまで三回にわたって「国分寺余話」を語って来た。いしおか補聴器さんのお店の一部を提供して頂いての会なので、12、13人で一杯になってしまふのだが、その12、13名を集めるのが大変である。今の所5、6名の参加を頂いているがも

う少し自分達の任んでいる処の事を知ろうとする
気持ちを持ってもらいたいものだと思う。ちなみ
に2月13日のテーマは、国分寺余話の番外編とし
て「中国大陸の国分寺」である。

国分寺は、聖武天皇が思い付きで造らせた皇
族・貴族の安泰を祈願する施設であるが、そのモ
デルというか、その発想は中国の真似である。今
回はそんな話を語り、雑談会を持ちたいと思っ
ている。

3月13日は、興亡の連鎖 その一(謀判への誘い)
です。

さて、先日美浦村の前村長で、劇団「宙の会」
を主宰しておられる、市川紀行氏とお逢いして、
いろいろお話しをさせてもらった。市川氏とは、
一昨年、美浦村で行われた劇団「宙の会」の公演
を観にいった縁で、ことば座の公演にも来て頂い
ている。市川氏にこんなことを考えているので
すが、話しをした内容は「常世の国の一万人朗読
会」というものであった。

常世の国の一万人朗読会

白井啓治

二〇〇四年六月、ふるさとルネサンスの民話ルネ
サンス塾の講師を引き受ける事になった。そして同
年九月に民話塾から上がってくる物語を朗読劇に表
現しようと劇団「しゅわーど」を立ち上げた。

一万人朗読会の発想はこの時すでに持っており、
ふるさとルネサンスの主宰者にもその話しをしたの
であった。その時は、一万人という単なる大風呂
敷と思われるから千人ぐらいで進めてみる、と言っ
たのであったが、ふるさとルネサンスは主宰者の失
踪、頓挫でこのアイデアも消滅したのであった。

その後、ことば座と女優小林幸枝を育てあげるこ
とで「一万人朗読会」の発想は忘れていたのであっ
た。しかし、ことば座の第一ステージである三年
が終了し、第二ステージに入った今年からは、質
を上げるため定期公演が年二回となり、些か時間
的ゆとりが生まれたことや、こうした一万人朗読
会などと言ってもビックリしないで、面白そうだ
などと賛同してくれそうな人達が、ことば座や風の
会の周囲に近付いて来てくれた事が、発想を思い
出させてくれたと言える。

ふるさとの大空に向かって自分達の思いを大声
に謳いあげる、こんな発想に面白いな、と興味を
示してくれそうな人と言うとやはり、舞台を作り
上げることの経験のある人である。それで思い出
したのが、市川氏であった。

早速、市川氏に連絡を取ると「一万人。それは
面白そうですね」と即断に約束が出来たのであっ
た。

お会いして初めて知ったのですが、日本で最
初に村を挙げての「第九の大合唱」を実現させた
のは美浦村で、市川氏が村長の時だったのだそ
うです。その話しを聞いたとき、どおりで一万人朗
読会と聞いても驚くことなく、面白い、と思っ
て頂いたようです。

まだ発想段階なので、詳しい事は、企画を盗作
されかねないので秘しておくが、霞ヶ浦を囲む常
陸国、信太郡・行方郡・鹿島郡・茨城郡の住人一
万人が、各郡(更に郡内を分割した地域)を讃歌
する詩を創り、それを鎖朗読しながら一つの物語
として謳いあげる、というものである。

大風呂敷と言われるかもしれないが、私は十万
人朗読会でも良いと思っっている。それこそ十万人

の常世の国の住人が、三日三晩自分のふるさとを
讃歌・自慢する詩を鎖連歌ならぬ鎖連読(鎖朗読)
したら、壮大かつ他に真似のできぬことであろう
と思う。

これを聞いて馬鹿馬鹿しいと思う人もいるでし
ょうし、これは豪快、傑作と思う人もいるでしょ
う。しかし、己の不辛や世の不景気を受け身に捉
えて嘆くよりも、現状の既成を己の拳で突き破っ
てやる、と考え実行してみる事が必要であろうと
思う。

編集後記

今年は、いろいろな面白い事が起こりそうな
気配がしています。

HPが木村さんの頑張りで、新しく模様替え
し、ことば座の小林さんの演技がスライド・
ショーでみる事が出来ます。時間があしまし
たら是非一度ご覧になってみてください。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

朗読舞劇団「ことば座」

ことば座は、ふるさと「常世の国」の暮らしの歴史を大切に考え、明日の希望の物語を朗読舞に表現する劇団です。朗読舞は、ふるさと「常世の国」に生まれた全く新しい舞台表現です。朗読を「手話を基軸とした舞い」に演じる小林幸枝は、世界でただ一人、朗読を手話に舞う女優です。ことば座は、ギター文化館を発信拠点として朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています

2010年ギター文化館定期公演予定

第18回定期公演 6月18、19、20日

第19回定期公演 11月19、20、21日

その他、8月には薪灯りによる朗読舞を計画中です。

ことば座では三年間の第一ステージの活動を終了し、本年より第二ステージの活動となります。

ギター文化館以外での公演等の活動も積極的に展開してまいります。

詳しくはことば座事務局までご連絡下さい。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優及び朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂きます。研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）

面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り

養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）

指導月4回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

詳しくは、ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井までご連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp